



# 図書館だより

2021.4  
No. 35

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123  
TEL 0956-47-2191 (代表)  
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

## コロナ禍の中で 出会った本から

木村 務  
(学長)

新入生のみなさん、生命のエネルギー溢れる青年期に新型コロナウイルス感染症の災禍に遭遇され、一体世の中はどうなるのか、自分の人生はどうなるのか、このような問いを繰り返されてきたのではないのでしょうか。それは老年期にある者にとっても同じで、私は考えるヒントを本の中に探してきました。そのひとこまを紹介しましょう。

ちょうど1年前の春、急激な感染拡大が起こったイタリア北部の町で多数の死者が大きな穴に埋葬される報道映像が何度も繰り返され、ヨーロッパの各地で都市封鎖（外出禁止）が実施されてきました。その映像を見てアルベール・カミュ『ペスト』を思い起こした方は少なくないでしょう。

昨年多くの国でベストセラーになったこの小説は、1947年にフランスで出版され、日本では1950年に翻訳されましたが、この本がよく読まれたのは「不条理」という言葉とともに実存主義哲学がはやっていた1970年前後でした。当時学生だった私は新潮文庫版を手にしたのですが、様々な人間模様や宗教がからんで読みづらく、飛ばし読みしながらも、どんなに功德を積んだ人でも、無垢な子供でも感染し苦しみながら亡くなってしまうという「不条理」だけは理解しました。現代でもヨーロッパの国々では外出禁止という厳しい措置を受け入れている理由もわかります。

グローバル化と地球温暖化のもとで、以前から新たな感染症の大流行に警鐘を鳴らして

いたフランスの経済学者ジャック・アタリ氏の論評『命の経済』（プレジデント社、2020年）は注目に値します。アタリ氏は、世界で感染爆発を許した背景には、グローバル化とデジタル技術によって相互依存が深まったものの、一方では利己主義・偏狭・他人の考えを受け入れない時代になっており、また、先進国では医療制度を国の財産ではなく負荷とみなすイデオロギーがあり、さらに世界の45%の人々が満足のいく衛生設備を利用できないという現実があるにもかかわらず「悲劇は起こり得る」という人類の感覚の喪失があったからと指摘されました。初発地がどこであろうと起こるべくして起こったというわけです。

アタリ氏は、世界中が自分や自国を守るために外出禁止策や他人や他国に責任転嫁する「排他的利己主義」に陥っているが、「利他主義」であるべきで、パンデミック後の世界は、他者としての「将来世代の利益を考慮する社会」でなければならないとしています。しかし現実には、国民が命の危険にさらされ、コロナ禍への対応がうまくいかない中で、自由主義や民主主義への懐疑が生まれ、強力な指導・統制力を求めるポピュリズムあるいは権威主義への傾斜がいくつかの国で見られるようになり、それを1930年代のファシズムの登場と重ねる考え方も出ています（「パックスなき世界」日本経済新聞2021年3月31日付）。

多国間の協調や市民間の協力の代わりに、なぜ排他的利己主義と強い指導・統制力による性急な解決を求める声が市民から出てくるのか、このことを考えるのに、1941年に出版されたエーリッヒ・フロム『自由からの逃走』（東京創元社、1951年）は示唆的です。この本は1951年に翻訳され、自由社会から

なぜファシズムが生まれたのかの問いに対する答えとして1960年代によく読まれましたが、再び今、このコロナ禍の中でよく読まれているようです。

近代的産業組織の中で人間は、封建的なくびきから解放され自由になったが、厳しい社会の現実に直面するや、耐えがたい孤立感・孤独感に打ち勝つために2つの道の岐路に立たされる。その1つの道は「積極的自由」としての民主主義の道であり、もう1つの道は「逃避」、自由を捨てて権威主義的な力に依存する道である。フロムは、1930年代のドイツを目の当たりにして社会心理学的分析を行い、後者のメカニズムがファシズムであると

しました。

「逃避」せずに「積極的自由」を獲得する機会は大学の中にあったと、今日における大学の意義を考える本にも出合いました。それは、学校にも通わず両親の偏った宗教教義の中で育った主人公が、大学のゼミや論文作成を通じて自らを見出していく物語、タラ・ウェストバー『エデュケーション—大学は私の人生を変えた』（早川書房、2020年）です。SNSで陰謀史観など偏った考え方が容易に入ってくる時代であって、自ら調べて考え発表することの大切さを教えてくれる本です。



## 学術書を読んで 役立てるには

田代 智治  
(経営学科講師)

コンピューターの進化と高速通信網の整備による2000年以降のICTの急速な発展と普及、そして多数のSNSの登場は、「情報」の在り方を根底から変えた。今や、その気になれば誰もが自宅に居ながらPCを通して世界中の情報にアクセスすることができる。スマートフォンが無い時代は、留学や海外出張も一苦労だった。片言の英語を駆使して『地球の歩き方』や現地の地図を頼りに、なんとか目的地にたどり着く。私がまだ20代の時、留学先のオーストラリア・パース空港に深夜に到着するも、依頼していたピックアップ業者が時間を間違え、初めての海外で空港に独り連絡もつかない状態で2時間ほど待たされた時は、生きた心地がしなかったことを今でも覚えている。近い将来、「ポケットク」のような技術発展により、日本人最大のディスプレイアドバンテージであった言語の壁もなくなるだろう。

そのような状況のなかでも、今も昔も変わ

らない良質な情報源が「本」だ。インターネットが提供する情報は、膨大かつ多様でタイムリー、なかには有料なものもあるが、手軽に何時でも何処からでもフリーにアクセスできるという最大のメリットが存在する。気を付けなければならないのは、インターネットが提供する情報には有象無象のものが多く含まれているということ。極論をいえば、無価値とまでいえないまでも、タダのものにはタダの価値しか存在しない。玉石混交なのである。

その点、学術書には、研究者が血の滲む想いで、何年も、時には何十年も時間をかけて築いた「理論」が鮮やかに描かれている。政治学者で社会学者、経済学者でもあったマックス・ウェーバーはいう、「シーザーを理解するためにシーザーである必要はない」と。学術書を読むことをめんどくさいと思うか、学者・研究者が長期間かけてひねり出した理論を2週間程度の読書で手に入れられることを「よっしゃ」と感じるかは、学生諸君次第なのである。

しかし、ここで注意しなければならないことがある。特に私が専門とする経営学分野では、すべての人や病気に効果を示す万能薬が存在しないように、理論が全ての答えを与えてくれるわけではない。入山章栄教授（早

稲田大学大学院経営管理研究科)は、経営学が「役に立つ」視点から提供できるものは、「理論から導かれた『真理に近いかもしれない経営法則』」と「実証分析などを通じて、その法則が一般的に多くの企業・組織・人にあてはまりやすい法則かどうかの検証結果」であると述べ、それらは「思考の軸」にすぎないと指摘する。理論と論理は似て非なるものだ。理論が、個々の現象を法則的に説明できるよう組み立てられた知識の体系を指す一方で、論理とは、考えや論証を進めていく過程を指す。同じ病気でも人によって医者の治療方法や処方箋が違うように、学術書で手に入れた理論を、ただ単純に現実にあてはめて上手くいくはずがない。学術的な理論の正しい使い方とは、それらを思考の軸として状況に応じた形で論理的に組み立てて進めていくことが求められるのである。

最後に、私の専門分野である経営戦略論と中小企業論に関連した学術書を紹介したい。1冊目は、末松玄六著『中小企業の経営戦略』である。末松玄六先生は、経済学中心であった中小企業研究に、経営学視点を持ち込んだ研究者として知られている。この本は、1972年に発行され、もう既に49年たとうとしている。古典といえるほど古い本ではあるが、

時代背景や市場環境の違いから現在の状況にあてはまらないこともあるものの、本のなかで展開される各種理論を含め原理原則を学ぶには最適で、これらを「思考の軸」として使うことができる。2冊目は、2015年に発行され比較的新しいサラス・サラスバシー著『エフェクチュエーション:市場創造の実効理論』である。これまで、企業家は発掘されるべきもので育成されるものではないという経営学者の常識に対し、企業家の行動原則は、熟達によって獲得されるものだとは結論づけた、挑戦的研究である。現在は、この本のなかでサラス・サラスバシーによって提示された「エフェクチュエーション」の理論を基にした教育プログラムがいくつかの大学で開発されている。学術的理論の実践展開に適した本であるといえよう。



## 2020年「印象に残った」本(DVD)

江崎 康 弘

(元国際経営学科教授)

若い時分から印象に残った本の読後メモをつけている。

学生時代から年間100冊読破を期しているが、最近は専門書が多く中々このボリューム感は無理だが、コロナ禍でステイホームであったこの1年間印象に残った本を以下に紹介したいと思います。本学退官の記念でもあります。

### 黒木亮「カラ売り屋、日本上陸」

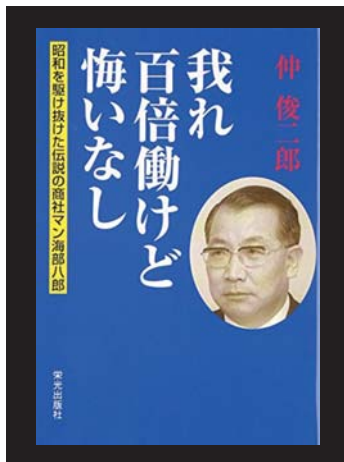
粉飾決算や株価が過大評価されている企業を探し出し、カラ売りを仕掛けて追及レポートを発表、株価が下がったところで買い戻して利益を上げる投資ファンドである「カラ売り屋」。カラ売りという馴染みのない分野であったが、楽しめた。巻末に経済用語集もあり、適時参照しながら読むと理解が深まった。3つのストーリーが掲載。傘下のMS法人(メディカル・サービス法人は、日本では医療関係のサービスを行う営利法人)を使って病院買収に邁進する巨大医療グループ、架空売上げの疑いがあるシロアリ駆除会社、タックス・ヘイブンを悪用して怪しい絵画取引を行う総



合商社絵画部とそれぞれ対決。なかなかでした。

### 仲俊二郎著「我れ百倍働けど悔いなし」

日商岩井副社長で、グラマン事件で失脚した海部八郎の一生を綴った本。財閥系商社に対抗して船舶や航空機ビジネスを開拓。大型案件を受注するには知情意（商品知識、人間関係、意志力）が必要と説く。山崎豊子の不毛地帯の主人公・壺岐正のライバルである東京商事の鮫島のモデルとされる。ロッキード事件で起訴逮捕された伊藤・大久保の両名を、丸紅が釈放後厚遇したが、日商岩井の当時の海部の手腕に嫉妬した無能の辻（会長）植田（社長）の両名により、海部は追放されたと筆者は記す。会長・社長の無能ぶり？多分真実なのでしょう。規模感の違いがロッキード事件の田中角栄と同様に米政府の意向を受けた米企業（ロッキードとグラマン）のリークにより米国の意向に沿わない海部も失脚した。



その後、海部がいなくなった日商岩井は弱体化の一途を辿り、ニチメンとの合併で双日となった。国際ビジネスの尖兵として、活躍された点に刺激を受ける。

### 石井妙子「女帝 小池百合子」

先の都知事選で圧勝した「小池百合子」。本著の巻末に記載されている参考文献が150冊以上の多さとなっており、著者が3年半もの時間と情熱を費やして書かれた。長きに亘る地道かつ膨大な取材活動にて上梓した著者は称賛に値するでしょう。ひとりの人物像を追ったルポルタージュとしては極めて秀逸な著作だろう。本著で語られる「小池百合子」の様々なエピソードには驚愕する部分が多く、その傑物ぶり、裏表の顔の使い分け、政治家としての上昇志向はその是非や善悪を一旦置いて考えると、強烈な人間力、人間臭さを感じてしまうものでもあった。もし、記載されている数々のエピソードが事実無根ならば、小池都知事はすぐにでも名誉棄損で訴えるべきでしょうが、果たしてどうでしょう・・・ノンフィクションだが、ベストセラー小説に勝るとも劣らない内容ともいえる。

私見としては、すべて嘘ではないが真実とも言えない一虚実が混ざった毀誉褒貶の「小



池百合子の半生」、時の権力者や有力者を利用するだけ利用する上昇志向は、ある意味「凄み」さえ感じる。「蒼穹の昴」に描かれた「西太后」を彷彿させた。

### 山内英司「義理と人情の経済学」

高倉健主演の任侠映画のようなセンセーショナルなタイトルに関心を持ち読了。

この本のタイトルだけで軽蔑する人がいるかもしれない。著者は西南学院大学@福岡市の経済学部教授で経済学の博士号を保持されるアカデミシャンで、行動経済学を専門とさ

れる方。「義理」や「人情」という多くの日本人が潜在的に保持し好意的に捉えているであろうと考えられる不明瞭な概念を経済学的に捉え直すことで、ビジネスや家庭など経済と無縁でいられない領域を誰でも改善できるチャンスが生まれると説く。以下目次より

- ・甲子園高校野球は、なぜ全試合テレビ放送されるのか？
- ・義理と人情にもお国柄がある？
- ・社長がウナギを入社志望者に奢ることが経営の極意である。
- ・専業主婦家庭で夫婦喧嘩が少ないと危険な理由 など・・・

行動経済学者の作品です！ なかなかでした・・・

以下は毎日新聞に掲載された書評です。

「経済学はお金儲けのための学問であり、経済学者は血も涙もない人たちだ、と多くの人は思っているのではないか。そうすると「義理と人情の経済学」という本書のタイトルは定義矛盾ということになる。そのように思われた方は、経済学を誤解されている。それに、著者の山村氏は、非常に人間味溢れた経済学



### 大坪剛「ある商社マン 一炊の夢」

何気なくタイトルに惹かれ手に取った本であったが、結構面白かった。筆者の大坪剛さんのプロフィールは「平壤に生まれ必死の逃避行の末引揚げを果たす。九州工業大学卒業

後、住友商事に入社し、技術機械、プラント等の海外輸出を担当。インドを振り出しに、イラン、再度のイラン、フィリピンと駐在員を定年近くまで経験された。」とある。カーブ制のインド、イイ戦争中テヘラン、マニラでの事件など、高度経済成長期の日本人ビジネスマンの海外での活躍を描いている。インド、イラン、フィリピンいずれでも NEC（主に電話交換機や電話通信マイクロ



回線) とのコラボが描かれている。二回りほど年長の方であるが(私が NEC 入社時に直属の課長と同年輩)、かなり頷ける内容の一冊でした。

### 「メイドインジャパン」

2013年1月～2月にNHKのテレビ60年記念ドラマとして制作・放映された「メイドインジャパン」。これは8年前の放送だが、電機業界、そして、当時執筆していた博論の内容とも非常に関連していたので関心を持って見た記憶がある。

ドラマの概略：「唐沢寿明が演じるタクミ電機の営業部長・矢作は、会社倒産の危機を回避するため、再建戦略室を立ち上げる。7人の社員が秘密裏に集められ、リチウムイオン電池市場で勝負を賭けることになる。円高、欧州債務危機、中国・韓国等新興国の追い上げ。製造業が軒並み危機を迎える中、巨大電機メーカーが、「余命三か月」の倒産の危機に追い込まれたなか、会長特命で集められた7人が起死回生の策を打つ・・・が」家電、テレビ、カリスマ経営者、電池・・・となると パナソニック、三洋、シャープ等の関西家電メー

カーを想起させる。やはりポイントはグローバル規模で市場や商品開発しなければならないということに尽きる。



## 学術論文(卒業論文)と参考文献 —「協働」の概念を事例に—

黒木 誉之

(公共政策学科准教授)

現在、「協働」という言葉が、まちづくりの重要なキーワードとしてはもちろん、自治体の条例や計画等にも当然のように用いられている。多くの本や学術論文、そして学生の卒業論文でも「協働」の語が当たり前のようになっている。しかし、この「協働」は、果たしてその意味を十分に理解された上で活用されているのであろうか。

「協働」の概念を日本で初めて提唱したのは、日本の行政学者であり、私の恩師でもある荒木昭次郎である。そこで、荒木が「協働」を提唱するに至った経緯等を紹介するとともに、学術論文(卒業論文)における参考文献の意義について説明を試みたい。

日本の多くの研究者が「協働」に関する論文を執筆する上で参照しているのが、荒木昭次郎の『参加と協働－新しい市民＝行政関係の創造－』(荒木、ぎょうせい、1990)である。荒木は、ネーバーフッド・アソシエーション研究のため、1984年から85年にかけてアメリカのヴァージニア大学に留学した。その研究過程で出会ったのが、日本の協働論の起源ともいわれる「コプロダクション」(co-production)という用語である。この用

語は、当時、インディアナ大学の政治学者ヴィンセント・オストロム教授が「地域住民と自治体職員とが協働して自治体政府の役割を果たしてゆくこと」の意味を一語で表現するために造語したものである。荒木は、「コプロダクション」を「協働」と訳し、1987年5月、日本行政学会(於:名古屋大学)において「自治体の行政と市民:協働型自治行政をめぐる」をテーマに口頭発表、同学会誌上に論文として発表した。この発表を踏まえ発刊されたのが『参加と協働』である。

江藤俊昭は、行政と市民の対等な関係を強調するパートナーシップ(partnership)やコラボレーション(collaboration)という概念ではなく、その関係の中から生産性や結果も加味した概念と整理し荒木の「協働(co-production)」を評価している。さらに後年、荒木は「協働」の効果について2つの視点から説明している。第1に、デモクラシーの視点である。地域住民からなる多様な主体が、自治行政に参画し協力・連携を重ねていくことは、住民自治の拡充、デモクラシーの確保につながっていく。第2に、効果性、効率性の視点である。共通目標達成のために、公的サービスの受け手であった地域住民自らが、能力、資源、規模など互いに異なる点を尊重し、特質や個性に応じた役割と責任を担うことで、社会的効用(価値)を効果的、効率的に生産、分配していくことが可能となる。

このように、「協働」という言葉一つにも歴史があり深い意味がある。このため、「協働」をテーマにする本や学術論文であれば、荒木

の著書・論文が先行研究として参考文献に掲載されているのか、それがどのように活用されているのかによって、筆者の「協働」への見識が問われることになる。このことは、君が卒業論文の先行研究として読むべき本や論文を明らかにする羅針盤であることを意味する。そして、君自身の卒業論文が、読んでもらえる価値のある論文なのかを示すメルクマールでもあるのだ。

学生諸君、図書館に行こう！そして、本や論文と格闘しよう！そのとき、必ず巻末の参考文献を確認してほしい。その本や論文が、君たちの貴重な時間を費やす価値のあるもの

なのか、その重要なヒントがそこには隠されているのだから。



## Withコロナの 交通経済研究

魏 蜀 楠

(実践経済学科講師)

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。昨年4月に本学の地域創造学部に着任しました魏 蜀楠 (WEI SHUNAN) です。現在、「ミクロ経済学入門」「交通経済論」「基礎演習」「専門演習」などの科目を担当しています。私の研究について簡単に紹介させていただきますと思います。

私は、交通経済分析の方法論や交通社会資本の投資・運営のあり方、また新型コロナウイルス危機後の二次交通（空港、鉄道駅、バスターミナルなどの交通拠点から目的地までの交通のこと）のあり方などについて、国内外の事例収集と国際比較研究に取り組んでいます。人や物の移動としての交通は、文明社会の動脈として大きな社会的役割を果たしています。交通は、私たちの生活や経済活動、その他の社会的活動を支える最も基本的な基盤であり、なくてはならない必需的な位置を占めています。様々な経済活動を支える人の移動および物の移動（物流）が安全かつ円滑に行われる理想的状態を築くことが交通の

究極の目標です。幸いにして、科学技術進歩の歴史からみて、技術革新による交通手段の飛躍的発達、人類社会に輝かしい交通の成果をもたらしてきました。

ところが、こうした交通のプラスの側面によって私たちは大きな恩恵を受けてきたが、他方で望ましくないマイナスの現象によって大きな問題と課題に直面しています。たとえば、交通混雑、交通公害、交通事故、地方交通の経営難、移動制約者の問題、交通社会資本の水準と経済社会との非適合性、また人の移動と感染症の感染拡大の問題などのマイナスの側面があげられます。

交通経済論は、これらの交通問題を解決し、望ましい理想的な交通社会を構築することを究極の目標とするが、そのためには、まず第1に、現実に行き起きている交通の事実を正確に把握し、第





2に、その事実をベースに解決策を作成し、実行に移していかなければなりません。この2つの学問的な課題を研究するため、事実としての交通

現象・交通問題を解明するための実証的分析(positive analysis)、および望ましい交通のあり方を追求するための規範的分析(normative analysis)という2つの分析アプローチが用いられています。交通問題への2つのアプローチ(接近方法)によって、問題の背後に内在する因果関係について、さらには問題の解決につながる処方箋について、妥当性をもつ交通経済論の知識体系が形成され蓄積されることとなります。この交通経済分析の方法論について、衛藤卓也監修『現代交通問題考』(成山堂書店、2015年)の第2章で詳述していますので、興味のある方参考にしてください。

また2017年の夏に同本の中国語訳を担当させていただき、中国の人民交通出版社株式有限責任公司のご協力と北京交通大学邵春福教授のご指導を賜り、昨年(2019年)末に中国国内で出させていただきました。そして、昨年末に中国出版協会国際連携出版委員会、

中国新聞出版研究院、出版参考雑誌社の三者から中国2019年度の訳本類の優秀図書賞をいただきました。この訳本を本学(佐世保校)図書館にも献本させていただいており、中国語学習に興味・関心がある方のご意見・ご感想を聞かせていただくことを楽しみにしております。

昨年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、海外への留学・研修、ボランティア活動、海外現地調査を計画していた学生、また留学している最中の学生たちにとって絶望的な一年ともいえるでしょう。国境を越える人の移動どころか、一国内での人の移動、人の集まり、人と人の対面接触も最小限に抑えられました。もともといろんな人と出会えるはずの大学も、感染拡大対策を講じざるを得ない状況に陥りました。オンライン授業、オンライン発表会、オンラインミーティングなどの導入により、学友たちと楽しく交流する機会が減り、面と向かって議論できる場所も限られました。しかし、その一方で、私たちは人との関わりが減った分、自分自身と向き合う時間が増えました。大学のオンライン授業、ゼミ、読書などを通して自分に合った目標を立て、自ら学習・研究計画を作成して実践しようとする学生も増えてきていると思います。その中で迷うことも多いと思いますが、中国戦国時代末期の儒家思想家荀子の教え通り「不積跬歩、无以至千里」、つまり「半歩を重ねなければ千里の遠くまで行けない」という「実践」の意味を大切に、新型コロナ禍の中で自分に合った大学での学び方を収められることを願っています。

◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで(学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで)  
土曜日：午前9時～午後5時まで 休館日：日曜日・祝日・大学閉校日など

現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学外者の利用は控えさせていただくなど利用制限を行っています。

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2021年4月30日